

概説

RED DATA BOOK

維管束植物

植物相の概要

島根県の植物については、古くは『出雲国風土記』や江戸時代の「出雲国産物帳・隠岐国産物帳」などの中での記述であるが、学術上での研究は明治時代に始まったといえるであろう。明治22年(1889)、堀正太郎、明治31年に三宅驥一(1898)が隠岐諸島に植物調査に来て、明治40年には徳淵永治郎が隠岐諸島の島後、西ノ島、中ノ島の植物を調査し、堀、三宅の調査の結果の他、当時の知々井小学校教員松本常男の標本約130点をもとに「隠岐島植物分布論」(1911)に維管束植物619種を記載している。また、三宅驥一(1898)は「隠岐嶋ノ植物ハ太體ニ於テ山陰地方ノモノト大差ナシト云テ可ナルベシ」と記述していて、これは、その当時、山陰の植物相については、すでにかなり調べられていたようにも思われる。

昭和年代になってからは丸山巖(1929):仁多植物誌、林実(1936):北出雲植物小話、原貞吉編(1937):鱒淵寺附近植物目録、森山美具(1956):西部石見の植物目録、岡本香(1971):島根のスゲ属植物、宮本巖(1963):西部石見の高等植物目録、丸山巖(1963、67、69):山陰植物管見I-III、岡国夫(1968、69):隠岐の植物1-2、宮本巖(1973):島根半島植物誌、山本広(1980):隠岐島・島根県東部のシダ植物の分布について、木村康信・丹後亜興(1982-1986):島前の植物目録、丸山巖(1984):島根県大百科事典(植物項目265種)、杵村喜則(1989-1991):島根半島の植生と植物相、杵村喜則(1991):島根県のシダ植物、杵村喜則(2005-2006):島根県種子植物相など、多くの調査者の調査結果、報告があって、県内の植物相の全体がほぼ明らかになってきている。

島根県は本州の西端域に位置していて、北は日本海の南部に面し、南は海拔1,000~1,300m程の中国山地脊梁部となっている。年平均気温は海岸域で14~15℃、中国山地域で10~11℃前後の地域である。

県内における植物相は東アジア区(日華区)系の植物群の中で、本県より南に分布域が続く暖温帯系の植物は海岸寄りの地域に、冷温帯系の植物は中国山地及び海岸域に分布している。

(1) 主として本州南岸線を分布の北限とする植物群の分布について

県内に分布する植物の内、暖温帯系の植物は主として本州南岸線(ハマオモト線、年平均気温15℃線)を分布の北限とする植物を欠いた植物群による植物相となっていることになる。しかし、そのような状態の中で、県内には本州南岸線が分布のおもな北限となる植物のかなりな種数の植物が、おもに海岸域に分布していて、注目すべきことである。これは、現在での気候条件、特に温度条件において、県内の海岸域は石見部から島根半島あたりまでは年平均気温がほぼ15℃であり、対馬暖流が海

岸を北上することの影響も考えられて、それらの植物群の生育、分布を可能にしているものと考えられる。そして、現在での気候条件下にこれらの植物群が生育の限界として分布しているものと考えられる一方、過去における縄文暖期の植物分布の一部が現在の条件下で残存可能な植物のみの残存を可能にしている状態のものとも考えられる。

このような分布の植物は当然のことながら石見部に多く見られて、出雲部、隠岐諸島では種数が少なくなっているが、中には石見部には生育が確認されないで、出雲部、隠岐諸島にのみ本州南岸線以南から飛び離れて分布する植物も知られている。

石見部まで分布が知られる植物としてはカンコノキ、ホウロタイチゴ、ナシカズラ、コパンモチ、シイモチ、タイミンタチバナ、ボタンボウフウ、ナナミノキ、オオカグマ、ナガサキシダなどがある。出雲部、隠岐諸島まで分布することが知られている植物にはサカキカズラ、ハマニンドウ、イズセンリョウ、ホウライカズラ、フウトウカズラ、ハスノハカズラ、タロバイ、バリバリノキ、ダンチク、ヒトモトススキ、ヒゲスゲ、キノクニスゲ、シシラン、ホウビシダ、ナガバノイタチシダ、テツホシダ、ナチシダ、アオネカズラ、イシカグマなどがあげられる。また、島根半島、隠岐諸島に隔離的に分布が知られる植物にはシシラン、ナゴラン、カツモウイノデ、ヌカボシクリハラシなどがある。

(2) 冷温帯・北方・寒地系の植物群について

県内に分布する植物の内、東北地方、北海道などの北方に分布が続く植物や、朝鮮半島から中国大陸に分布が続く植物も多くの種類が知られている。それらは中国山地脊梁部や海岸風衝地、砂浜、また、山地の草原や露岩地などの不安定立地に生育地があって分布することが多い。

北方・寒地系の植物としてはハマハコベ、ハチジョウナ、エゾオオバコ、ハイネズ、ハマベンケイソウ、ハマナス、ヒョウタンボク、オオクグなどや、オオエゾデンダ、マンシユウハシドイ、エゾノヨロイグサ、ニッコウキスゲ、キンコウカ、ホソバアマナ、ミヤマベニシダ、シノブカグマ、シラネワラビ、ヤマドリゼンマイ、ミツガシワ、サギスゲ、リュウキンカなどが知られる。朝鮮半島から中国大陸に分布が続く植物はダルマガク、チョウジガマズミ、ヤナギイボタ、オニヒョウタンボク、モクゲンジ、ホソバママコナ、クルマバアカネ、ヒゴタイ、ホクチアザミ、ヨロイグサなどがある。

(3) 日本海側に特有な分布の植物群について

本県は日本海に面してはいるが、いわゆる冬季多雪の土地ではなく、冬季の降水量より夏季の量が多く、しばしば準日本海型気候区に考えられている。その中で、日本海側の多雪地に分布の中心がある特有な植物群とされる種の分布も見られる。これらの植物は県内では東部から石見にかけて、しだいに分布が

まれとなつて、種によってはその間に分布限界地がある。この群にはチシマザサ、オオバクロモジ、オニシモツケ、クロバナヒキオコシ、サンインヒキオコシ、タニウツギ、カンボク、サンインクワガタ、デワノタツナミノウ、ミヤマキケマン、ナガハシスミレ、トキワイカリソウ、ヒメモチ、カラスシキミ、エゾユズリハ、ハイイヌガヤ、チャボガヤ、ハイイヌツゲ、ツルシキミなどがあげられる。

(4) 中国地方に特有な植物及び県内に固有な植物について

これらの植物としてはダイセンヒョウタンボク、ダイセンミツバツツジ、ダイセンスゲ、ダイセンオトギリ、アラゲナツハゼ、キシツツジ、ヒメヤマツツジ、トゲナシアザミ、ビッチュウアザミ、サンベサワアザミ、サンインギク、ナツアサドリ、オキノアブラギク、トウテイラン、ヘイケイヌワラビなどがあげられ、そしてオキタンボク、オキノアブラギク、オキシヤクナゲ、オオメノマンネングサ、オウチカンギク、サンイントラノオ、イズモコバイモは島根県に固有な植物とされている。

(5) その他

襲速紀植物とされる種としてギンバイソウ、キレンゲショウマ、オオマルパノテンニンソウ、シロモジなどの生育地も知られている。

今回、この「しまねレッドデータブック」に取り上げた維管束植物は情報不足（DD）を含めて計366種である。

前述の「植物相の概要」で記載されている種類の多くは改訂版種選定カテゴリーの定義に従い、絶滅が心配される種として選定されているが、これらの植物種はもともと、生育する場所が限られていて、生育地の範囲、面積が小さい場合のものである。しかし、ここに取り上げられた植物の中には、過去におい

ては生育地が広い範囲にあつて、当時では絶滅が心配される状態でもなかつたものが、何らかの原因によって現在では存続が危惧される状態となったと考えられる種もある。本文解説中の選定理由に多くが「……生育地が限られ……」と記述されていて、現在に至る状況は記述されていないが、その植物の分布上でのもともと限られている場合と何らかの原因により生育地が限られてきた場合もある。

昭和30年代において植物に対しての直接あるいは間接的な干渉の結果として、植物の種類によっては生育地や個体群の激減、消滅が気付かれるようになった。化石燃料が有効に利用されて、薪炭が不用となり林地が放置されることにより、特に林縁草地などの草原状地の植物、オキナグサ、ムラサキセンブリ、ヒゴタイ、マツムシソウ、フクシマシヤジン、リンドウ、キキョウ、オミナエシ、センブリなどが激減してきた。また、機械化により、牛馬飼育のための草刈りは不用となり、同様に草原性植物が激減してきた。一方、各種土木工事は機械による効率化から農地での区画整理などにより水田周辺の水湿地の植物がかなり影響を受け、県内ではサンベサワアザミ、イヌセンブリ、トモエソウ、カキランなどの植物が激減し、生育地が消滅した場も多い。水田に関しては除草剤の開発、使用により水田雑草はほとんど絶滅状態である。山間の水田などでは僅かに水田周囲の水湿地に残されていたスブタ類、ホシクサ類など、減反政策により一時的に息を吹き返したようにも思われたが、水田周囲が樹林化することにより、絶滅寸前であり、県内全域での現状がつかみにくい。また、溜池や用水路においても同様にこの時期に多くの水生植物が激減、消滅した生育地が多い。特に里山の溜池では、除草剤や生活廃水の流入も考えられない池においても水生植物が全滅してしまった池が多く存在している。

(杵村喜則)